【2】釈尊の出家年齢に関する資料

［1］釈尊の出家年齢に言及する原始仏教聖典史料の伝承には次のようなものがある。まず年齢を明示する資料を掲げる。

［1－1］「２９歳」とするものが多い。

①DN.１６　Mahāparinibbāna-s.；私は２９歳で善を求めて出家した。スバッダよ、私は出家してから５０余年、正理正法の地を遊行した（ekūnatiṃso vayasā Subhadda , yaṃ pabbajiṃ kiṃ-kusalānuesī . vassāni paññāsa-samādhikāni , yato ahaṃ pabbajito Subhadda , ñāyassa dhammassa padesa-vattī）。vol.Ⅱ p.151

②長阿含２　遊行経；我年二十九　出家求善道　須跋我成仏　今已五十年　戒定智慧行　独処而思惟　今説法之要　此外無沙門。大正01　p.025中

③法顕訳　大般涅槃経；我在王宮未出家時、一切世間皆為六師之所迷酔、初未見有沙門実。……我年二十有九出家学道、三十有六於菩提樹下、思八聖道究竟源底、成阿耨多羅三藐三菩提、得一切種智。大正01　p.198下

④Mahāparinirvāṇasūtra；私は２９歳で善を求めて出家した。出家してから５０年余となった（ekonatriṃśo)vayasā Śubhadra yat prāvrajaṃ kiṃ kuśalaṃ gaveṣī , pracāśad varṣāṇi samādhikāni yataś cāhaṃ pravrajitaḥ Subhadra）。Waldschmidt本 p.376

⑤中阿含２０４　羅摩経；我時年少童子清浄青髪、盛年年二十九。爾時極多楽戯荘飾遊行。我於爾時父母啼、哭諸親不楽。我剃除鬚髪著袈裟衣、至信捨家無家学道。大正01 p.776中

⑥雑阿含９７９；始年二十九　出家修善道　至道至於今　経五十余年　三昧明行具　常修於浄戒　離斯少道分　此外無沙門。大正02　p.254中

⑦増一阿含４２－３；我初学道時年二十九。欲度人民故三十五年在外道中学……。大正02　p.752中

⑧Apadāna５５－５４３　迦留陀夷；（釈尊が）２９歳で出家し６年後に仏、化導者となる（ekūnatiṃso vayasā , nikkhamitvā agārato , chabbassa vītināmetvā＝異本ではchavassāni vināmetvā とする＝ , āsi buddho vināyako）（２０偈）　NDPS vol.Ⅱ p.152

⑨根本有部律・出家事；爾時菩薩年二十九、欲在王宮、受五欲楽、既見生老病死、心生厭離、中夜踰城、往詣林薮、六年苦行……。大正23　p.1026下

⑩根本有部律・雑事；（阿私多仙人）遂見二十九年捨王城去、六年苦行当成正覚。大正24　p.299上

⑪根本有部律・雑事；我年二十九　出家求善法　又五十余年　専行戒定慧　一心無散乱　唯求於正理　除斯真法外　無別有沙門。大正24　p.396下

その他これは過去仏の灯光仏であるが、

⑫増一阿含２３－１；時王太子年二十九、以信堅固出家学道、即日出家即夜成仏。大正02　p.609下

とされている。過去仏や未来仏は現在仏としての釈迦牟尼仏のイメージが投影されるのが常

であるから、これも一つの資料としてあげることができるであろう。

［1－2］また「１９歳」とするものがある。

①根本有部律・破僧事；（阿私陀仙人の予言として）即覩菩薩十九出家、六年苦行獲甘露果。大正24　p.109下

１９歳出家、６年苦行では成道は２５歳となる。しかし【3】で紹介するように原始聖典資料には２５歳成道説は見いだされない。ただ中国撰述の『仏祖統紀』に見られるのみである。

［1－3］「３１歳」とするものがある。

①別訳雑阿含１１０；三十一出家　爾来過五十　推求諸善法　戒定行明達　一切諸世間不知実方所　況知実法者　若修八正道　能獲於初果　乃至第四果　若不修八正　初果不可知　況復第四果　我於大衆中　説法師子吼　如此正法外　亦無有沙門　及与婆羅門。大正02　p.413下

［2］直接に出家年齢には言及しないが、間接的に示す場合もあると考えられる。成道年齢を明示して、出家してからそれまでの年数（苦行年数）を掲げる場合や、入滅年齢を明示して、出家してから入滅までの年数を記す場合である。すなわち成道年齢から苦行年数を除し、入滅年齢から出家してからの年数を除せば、出家年齢が求められることになるわけであるが、後に紹介するように原始聖典の成道年齢や入滅年齢を記す資料の中に、上記のような条件を満足させるものはない。

［3］釈尊の出家年齢に関する資料を紹介した。これには「２９歳」を初めとして「１９歳」「３１歳」などの諸説があることが分かるが、これら年齢がどのように受け取られていたかということを知ることも無意味ではあるまい。

［3－1］以下にこれを紹介する。

①DN.4　Soṇadaṇḍa-s.；尊者ソーナダンダは老い、年取り、高齢で、晩年に達しているが、沙門ゴータマは年若い青年出家者にすぎない（bhavaṃ hi Soṇadaṇḍo jiṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto , samaṇo Gotamo taruṇo c'eva taruṇaparibbājako ca）。

沙門ゴータマは年若く、漆黒の髪をもち、美しさ若さを有し、第１期にあるにかかわらず、家を捨てて非家に出家した（samaṇo khalu bho gotamo daharo va samāno susukāḷakeso bhadrena yobbanena samannāgato paṭhamena vayasā agārasmā anagāriyaṃ pabbajito）。vol. I　p.111

②長阿含２２　種徳経；沙門瞿曇少壮出家、捨諸飾好象馬宝車五欲瓔珞、成就此法。大正01　p.095中

③DN.5　Kūṭadanta-s.；クータダンタは老い、年取り、高齢で、晩年に達しているが、沙門ゴータマは年若い青年出家者にすぎない（bhavaṃ hi Kūṭadanto jiṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto , samaṇo Gotamo taruṇo c'eva taruṇaparibbājako ca）。

沙門ゴータマは年若く、漆黒の髪をもち、美しさ若さを有し、第１期にあるにかか

わらず、家を捨てて非家に出家した（samaṇo khalu bho Gotamo daharo va samāno susukāḷa-keso bhadrena yobbanena samannāgato paṭhamena vayasā agārasmā anagāriyaṃ pabbajito）。vol. I　p.127

④長阿含２３　究羅檀頭経；沙門瞿曇少壮出家、捨諸飾好象馬宝車五欲瓔珞、成此法者。大正 01　p.098 上

⑤ SN. ３－１；世尊は年若く、出家して新しい（bhavaṃ Gotamo daharo ceva jātiyā navo ca pabbajāya)。vol. I　p.068

⑥雑阿含１２２６；世尊幼小年少出家未久、而便自証得阿耨多羅三藐三菩提。大正 02　p.335 上

⑦別訳雑阿含５３；彼諸宿旧、尚自不信得阿耨多羅三藐三菩提。況汝年少而出家未久、而当得乎。大正 02　p.391 下

⑧別訳雑阿含２１２；沙門瞿曇年少出家、而富蘭那六師之徒、悉是耆旧宿徳之人、尚不能知、況彼沙門瞿曇、既是年少、出家未久、学日又浅、而当能解如斯之義……年雖幼稚、不応軽蔑。大正 02　p.452 下

⑨増一阿含３３－２；此沙門瞿曇、年少学道未久豈能知此事乎。大正 02　p.683 中

⑩ Suttanipāta V.420；あなたはまだ若く、年少であって、第一期に達せる青年にすぎない（yuvā ca daharo cāsi paṭhamuppattiko susu vaṇṇārohena sampanno jātimā viya khattiyo)。p.073

⑪ Suttanipāta ３－６（散文部分）；沙門ゴータマは生年も若く、出家も新しい（samaṇo hi Gotamo daharo c'va jātiyā navo ca pabbajjāya)。p.093

⑫四分律・受戒揵度；余有沙門婆羅門耆年出家学久、猶尚不能解此偈義、況此沙門瞿曇、年尚幼稚出家日浅、豈能解耶。復作是念、年雖幼稚、亦不可軽、亦有年少出家学道得阿羅漢、神足自由者……。大正 22　p.791 中

⑬五分律・受戒法；此六師等年耆博見、尚不能解、況沙門瞿曇既自年少、出家始爾而能解乎。復念……瞿曇雖少不可軽也。大正 22　p.106 上

［3－2］ここでは釈尊はまだ若く、経験も乏しい宗教家として見られていたことが分かる。おそらくこれは釈尊が悟りを得てから間もなくのことをイメージしているのであろう。それは①②③④⑨⑪などが釈尊の評判が聞こえ始めたので訪れたというシチュエーションとも合致する。まだ釈尊教団が十分に根を下ろしていないことを髣髴とさせるからである。

もし釈尊が「２９歳」になってから出家して、その後次項で述べるように「満６年」の苦行を経てからのことにしては、漢訳資料における「年少」とか「年尚幼稚」という表現はいささか気にかからないでもない。しかしこれは①②がソーナダンダ、③④がクータダンタというすでに老境にあった尊敬を受けているバラモン、⑧が１２０歳になる老バラモン、あるいは⑤⑥⑦⑧⑨⑫⑬は、これらの資料では釈尊よりかなり先輩とされているプーラナカッサパなどの六師外道などに対比して述べられたものであり、比較対照させるための表現がなされたものであろう。

また次号のモノグラフにおいて出家制度の形成過程について論じる予定であるが、後の釈尊教団においては、７歳などという文字通り「幼児期」にある童子も出家させるようになった。しかし釈尊が出家し、布教を始められた当初においてはそれは異例のことに属し、おそ

らく結婚し、子供を作って、この子が成長して家業を継いでから出家するという、いわゆる四住期のようなものが成立しかけていて、それを前提に考えられていたであろう。釈尊もラーフラができてから出家したが、生まれたばかりのことで、その分一般よりは早かったのかもしれない。

［4］念のために後世の仏伝経典の伝承を見ておこう。

［4－1］次のものは「２９歳」とする。

① Mahāvastu āvalokita-sūtra ; 菩薩は２９歳で出家した（ekūnatriṃśo vayasānuprāpto paripācayitvā jagadbodhisatvo）。Snart 本　vol.II　p.299

②十二遊経；仏以二十九出家。大正 04　p.146 下

③衆許摩訶帝経　巻３；（阿私陀仙）如是観已得見太子、出彼王城入於山野、年二十九、於其山中六年苦行、証甘露滅成無上道。大正 03　p.941 上

［4－2］次のものは「１９歳」とする。

①太子瑞応本起経　巻上；至年十九、四月八日夜、……踰出宮城。大正03　p.475中

②修行本起経　巻下；至年十九、四月七日、誓欲出家、至夜半後、明星出時……、於是城門自然便開、出門飛去。大正03　p.467下

③過去現在因果経　巻２；爾時太子心自念言、我年已至一十有九、今是二月、復是七日、宜応方便思求出家。大正03　p.632中

④過去現在因果経　巻２；阿私陀仙、昔相太子、年至十九、出家學道。大正03　p.636上

［4－3］出家年齢には言及しないが、パーリの“Nidānakathā”は【3】の［5－1］で紹介するように成道年齢を３５歳とし、［5－3］で紹介するように苦行年数を満６年とするから、計算上は「２９歳」出家説に基づいていたことがわかる。

［5］次にインド撰述とされる文献で釈尊の出家年齢に言及するものを掲げておく。以下の各節、各項に紹介するインド撰述・中国撰述文献記事については、馬田行啓の「仏伝年次考」（『仏教史学』第３編第２号～第9号　大正２年５月～１２月　仏教史学会）に負うところが大きい。

［5－1］「２９歳」とするものには以下がある。

①出曜経　巻１３；汝今学以来日浅、二十九出家、自云六年苦行、云何能成等正覚乎。……年二十九出家求道、誇世自称成無上道耶。仏告王曰……。大正04　p.680中

②鞞婆沙論　巻１４；従兜術天終降生母胎、十月已満住林毘園生、即行七歩、二龍浴身二十九出家、三十五得道、六年苦行已。大正28　p.523上

③尊婆須蜜菩薩所集論　巻１０；（広説如雑阿含）二十九修跋陀人、我出家行学道、我已知五十歳。於中學修跋陀。大正28　p.803下

④八大霊塔名号経；二十九載処王宮。大正32　p.773中

［5－2］「１９歳」とするものに以下がある。

①摩訶摩耶経　巻下；已長大至年十九、便於中夜踰城而出。大正12　p.1012中

②大智度論　巻３；我年一十九　出家学仏道　我出家已来　已過五十歳　浄戒禅智慧

外道無一分　少分尚無有　何況一切智。大正25　p.080下　（宮内庁版では二十九とする。このほうが正しいと思われる。）

［5－3］「７歳」とするものもある。

①梵網経　巻１０；七歳出家、三十成道、号吾為釈迦牟尼仏。大正24　p.1003下

ただしこれは中国撰述と考えられるもので、それほど信頼するに足らない。仏典においては沙弥として出家する年齢が７歳である場合が多いので、おそらくこれに影響されたものであろう。

［6］次には中国撰述の文献で出家年齢に言及するものを掲げる。これには経の引用をするものも含めた（以下同じ）。中国撰述文献の記述はいずれにしても、多くはインド撰述の文献に依ったものであって（中には推論で述べるものもあるが）、中国伝承がどのような文献の系統を引くものであるかを知るためにも役に立つであろうからである。

［6－1］「２９歳」とするものはなく、「１９歳」あるいは「２９歳」とするものに含まれるのみである。

①大唐西域記　巻６；踰城出家時亦不定、或云菩薩年十九、或曰二十九。以吠舎佉月後半八日踰城出家。当此三月八日。或云以吠舎佉月後半十五日、当此三月十五日。大正51　p.903上

②釈迦方志　巻上；其側塔者剃髪処、年自不定或云十九、二十九者。大正51　p.959下

［6－2］「１９歳」とするものが多い。

①釈迦譜　巻１；爾時太子心自念言、我年已至十九、今又是二月復是七日、宜応方便思求出家。大正50　p.024上

②歴代三宝紀　巻１；（僖王）八年壬子年十九四月八日夜半踰城出家十二遊経云、仏二十出家。増一阿含経第二十四巻云、我年二十九出家欲度人故。又云。年二十在外道中学。長阿含亦云、年二十九出家。推其大例如来在世七十九年、若二十九出家三十五成道、所可化物唯応四十五年。而禅要経云、釈迦一身教化衆生四十九年。諸経多云、十九出家。今以此為正。若以二十九出家三十五成道、経中蓋少。且云、二十年在外道中学。便是五十年方成道。是知為謬也。大正49　p.023中

③唐護法沙門法琳別伝　巻中；昭王四十二年壬申之歳四月八日夜半踰城出家、故瑞応経云、太子十九四月八日夜半…。大正50　p.207中

④釈迦氏譜；（経云）至年十九、思出家時将已至矣。大正50　p.090下

⑤釈迦氏譜；（『因果』云）我年十九、今二月七日出家時至。大正50　p.091上

［6－3］「２５歳」とするものもある。

①仏祖統紀　巻２；当以二十五為出家之年審矣。大正49　p.145上

注に次のように言う。『瑞応』『因果』『中本起』『大論』は「１９歳出家」という。『十二遊』『増一阿含』『中阿含』『雑阿含』『長阿含』は「２９歳出家」という。どの説に従うべきかといえば、如来の寿命は８０歳で、「５０説法」を除すと、『梵網』『無相三昧』『宝蔵経』等がいう「３０成道」となる。もし「３０成道」であるとすれば、「６年苦行」を除すと荊溪がいうように「２５出家」となる。上の「宝蔵の説」と合する。また出家の後６年苦行と、妃が６年後に子を生んでそれが成道の年であることは『賢愚経』がいうところであり、『普曜経』の「勤苦６年」の後６年して、１２年目に故郷に帰るという記述と

合致する。だから「２５歳出家」が正しい、と。したがってこれは論理的に導かれた説ということになる。

［7］以上、釈尊の出家年齢記事について紹介した。原始聖典ではパ・漢資料ともに「２９歳」とするものが多く、「１９歳」とするものは例外で、しかもこれでは苦行を６年とすると―後述するようにこれ以外の伝承はない―成道が２５歳となって不合理であるが、それが仏伝経典やインド撰述文献では「１９歳」説が増加して、「２９歳」説に並ぶくらいの用例となり、中国撰述文献に至るとほとんど「１９歳」説一色になるという不思議な現象が生じていることがわかる。